

## 専修大学における保健体育科目の成り立ち

本 田 泰 治

少子化の中での大学改革、まさに生き残りをかけての大学改革である。学内でも各機関、部署で様々な検討、提起がなされて、ほぼ一定の方向性に絞られているようだ。そのような状況下にあって、我々の担当する正課体育がどのように位置づけられているか、存在意義を問われている時でもある。社会的な趨勢は、大学体育が正課だけでなく、課外も包括して新しく変容する事を期待されているようである。専修大学では体育の担当者よりも、むしろ他の領域の教員や法人サイドから、将来を見据えた新構想が期待する動きがある。

ここで我々が永年携わってきた一般体育は、どうであったかを振り返る事が、未来へ向けての構想の出発点ではなかろうかと思う。そこで永年勤続の私に新制大学発足時以降（昭和24年）の正課体育について調べてほしいとの要請があった、私の入職は昭和35年であって皆目分らない。そこで定年退職された山本先生（昭和31年入職）、水沼先生（昭和28年入職）、途中順天堂大学に転出された小宮先生（昭和31年入職）のお三方と、私と同時入職の平木先生にお集まりいただき、当時のことをフリートーキングの形で聞かせていただいた。

内容については、社会体育研究所報44号の山本先生御自身が執筆された「昭和30年代頃の思い出」の領域を出るものではなかったが、各先生方の当時の概観を伺うことができた。以下、内容を山本先生の「昭和30年代頃の思い出」も引用しつつ、要約することにする。

まず私の方から、各大学が生き残りをかけて学部学科の新設や衣替えをしているが、その中に体育やスポーツに関連するものがあり、それらの新設学部、学科に多数の応援者がいる。このような社会現象ともいえる時に専修大学も手をこまねいているだけではいけない。何とか現有勢力だけで、他の一般教養のスタッフとタイアップしてでも、何か考えられないかとの要請があり、体育教員も自分達の案を出した。全学的に

は幾通りのものがでたようである。何か良いアイデアはないでしょうかと問いかけてみた。

お三方とも、これだけ各大学が似たようなコースを立ち上げているのだから、余程、特徴のあるものにしないといけないだろうという点では意見の一致をみた。今、日本ではコーチの養成コースはあるようだが、トレーナーの養成コースを持っているのは少ないのではないか。それは、企業や団体がトレーナーを採用するだけの余裕がなく、需要がないのでトレーナーコースを作ることを控えているのではなかろうか。しかし、希望する人はかなり多く、日本に受け入れてくれる大学がないので、アメリカの大学まで出かける人もいるとのことだ。このように資格の取れるコースは、今後の社会基盤の改善を先取りする形で魅力的ではないかとの意見があった。

このような話し合いの中から、①私が大学体育の導入の経緯について、②導入後の他大学の取り組みについて、③専修大学の取り組みと実情について、④昭和30年代の専修大学の運動施設について、私の記憶をもとに作成した図等を書いた資料をもとに本題に入っていった。

まず昭和24年新制大学に学制が改革された際に、GHQの意見も取り入れて、新制大学では体育を必修にするという提案をしたところ、余り議論をすることもなくすんなりとその案が通り、逆に提案した体育サイドが慌てたと、当時の提案者の中心メンバーであった加藤橘夫先生が体育連合会の資料に書かれていた。このように、余り議論をつくさない中での保健体育の導入だっただけに、後に昭和36年に学術会議が内閣総理大臣に「大学の保健体育の単位を無くせ」と見直しを勧告した。その後、中央教育審議会等の議を経て平成3年の文部省令として、最終的に大学改革が終結し、各大学の裁量にまかされるようになった。現在の専修大学は従来の理論4単位、実習2単位は必修として残されているが、時間数は半減した。

新制大学発足当時は、余りにも唐突な一般体育の導入に、各大学共に苦勞したと思われる。設置基準を満たすための施設の確保、これは各大学ともが郊外にグラウンド施設も含めた校地を求めたこと、わが専修大学が生田キャンパスを入手したのも例外ではなかった。次は教員組織であるが、これは旧制の中学教員の養成機関であった高等師範（教育大、現筑波大学の前身）の卒業生を中心に大学に転入させ、旧制の大学の場合はその大学の運動部の指導者やOBがその任（体育実技）に当たってよいとされた。今は少なくなったが、旧制大学の体育教員がその大学の運動部OBが多かったのはその名残りである。理論の方は保健理論が中心で、校医を中心に医師が担当した。専修大学に於いても、大行、紅林（康）の医師が保健体育理論を担当した。実技については相馬学長が陸上競技で親交のあった江尻先生に相談して、教育大学の体育管理室員の協力を得て、柔道、剣道の師範やOBの平野、栗村、鶴岡や、野球、ラビ

一の監督やコーチの吉本、玉野の諸氏等で実技を担当したようである。

組織においても未分化であり、課外と正課が混同していた時代だともいえる。その中心となったのが玉野穰氏であり、昭和28年度の水沼先生の入職、31年度の山本、小宮両先生がスタッフに加わり、この頃から専修大学の体育は他大学の注目を浴びるような様々な展開をするようになった。当時玉野氏は事務組織の上では体育課長であったが、正課体育では野球やラグビーを教え、ラグビー部の監督も務められていた。氏は専修大学の学内の運動施設の貧困な状況から、施設の充実を図りながら、学外の施設を利用することを考えた。各種シーズンコースや商業施設の利用である。氏はシーズンコースにおいては、スキーやスケートの研修会に自ら率先して参加し、技術の習得に努力され、実習を開講し学生達を指導された。氏の明るいキャラクターは各研修会の参加者の支持を得て、DSK（大学スキー研究会）では幹事長に推され、事務局を専修大学に置いた時期もあった。シーズンコースでユニークだったのは、当時アメリカの大学のカリキュラムコースにあったモータースポーツを真似て、自動車の実習をシーズンコースと、学内授業で展開したことである。これも山本先生の入職という人材を生かすアイデアであったが、他大学では真似のできることはなかった。ユニークな発想で次々と展開されるカリキュラムの中で、一般体育での対象者として、運動能力の高い者をA群とし、一般の学生はB群、身体の障害、虚弱者をC群と分けて指導することが、大学体育協議会で話し合われていたようだ。ユニークなカリキュラムを展開してきた専修大学の特徴ともいえるこのC群に対するきめ細かい配慮がなされるCコースがシーズン、定時共に置かれていたことである。

商業施設を利用したスケートや水泳の授業等、学生達には様々なサービスを展開するのだが、指導スタッフは大変であった。専修大学の体育が軌道に乗り、現在の形に整備されてきたのは、昭和30年代であり、玉野イズムをフォローし、まとめあげてくれたのが、山本、小宮、水沼の先輩達である。その後、運動施設も含めての生田キャンパスの整備も徐々に進み、当初一年次だけが生田校舎ということであったが、法学部の二年次以上のみが神田校舎という、現在の形になった。

教員のスタッフもそれなりに増強されたが、人事計画の一貫性がなく、年齢構成等の歪みが生じ、反省の余地が残るところであった。

以上が専修大学を含めて、新制大学移行後の昭和30年代の事柄であるが、40年代に入り、新学部構想が持ち上がり、他の大学が驚くような人材である今村、前川、小林、杉、江尻、坂井田、阿久津、清水(勇)等の諸先生方が来られたが、体育学部の誕生には到らなかった。そのいきさつについては別の機会に述べるとして、多くの先人達の思いと努力によって今日の専修大学の体育があり、学生達に喜ばれる体育であるように皆で協力して育ててもらいたいものである。

## 30年代の概念図

